

文芸研二年入

2024年5月10日
—NO. 166—

発行 文芸教育研究協議会
編集 文芸研事務局



新年は「文芸教育」の読み合わせから(野澤家)

卷頭	辻委員長より	・	・	・	・	・
山口大会に参加して（徳島より）						
サークル便り（東京サークル）	・	・	・	・	・	4
青年学校便り	・	・	・	・	・	5
事務局通信	・	・	・	・	・	6
事務局員の妄想日記	・	・	・	・	・	10
	9					1

◆委縮、自肅、自己規制・・・今ならできる」とつぶやき

今年一月、新聞報道を皮切りに奈良教育大学付属小学校の教職員に対し「法令違反」「不適切」授業が行われていると不当な攻撃が始まりました。詳細は省きますが、図工で教科書を使わず教師の作成したプリントで授業、毛筆の代替に筆ペン使用、道徳の授業時間をとらない等、付属小の教育実践が教科書を使わない、教學習指導要領に沿わない、極めて勝手なものだという論調にはあきれらばかりです。

これは奈良教育大付属小の教師や児童、保護者の攻撃ですが、この影響はおそらく全国に波及するのではないかと危惧しています。例えば道徳。これ一つ取り上げても、二〇一八年から始まつた道徳の教科化に抗して、一応教科書をめぐりはするものの読んで終わっている先生方も多いと思うのですが、今後管理職からの調査や指導が強まるかもしれません。そうなると、不当な処分を受けないため、いやそれ以前にそこに生じるつまらぬ軋轢を避けるた

委員長
辻惠子

教師にとって創造的であることは

め、先生たちが自己規制しかねないと案じられてなりません。

このことは、一一〇一二二年五月に公開された映画『教育と愛国』の監督、齊加氏の話を思い起させます。齊加氏によると、映画を観た九七歳の元教員生野さんはから次のような感想が届けられたそうです。

「鬼畜米英、敵はアメリカとイギリスだと教わり、国策のしもべとなつた公教育を受けて二十歳で敗戦を迎えた先生が生涯をかけて訴えること、それは『教室から戦争を始めることができる』ということです。」

教育に政治が忍び寄る深刻な状況に対し、政治と対峙した生野さんは、「周囲が本気で怒らなかつた。それが怖い」と繰り返しました。怒りや批判は政治の劣化へのブレーキ役です。と齊加氏は語りました。私が今、案じるのは「周囲が本気で怒らなかつた」ということ、さらにはいえば自分の安全のために委縮してしまつて自己規制し、自粛してしまう事態です。國中が戦争一色に染め上げられたときに自分や家族の身の安全を打ち捨てて抗うことは困難を極めるに違ひなく、そうなつてしまつてからでは遅いということなのです。

右傾化するこの国で、今ならまだ言えること、であります。それはすでに勇気のいること

かもしだせませんが、それこそ自己規制しないで自分ができること、やりたいことに取り組んでください。自主教材を用いるのに二の足を踏んでいたら、同僚の先生に「これいい教材だから、是非やつてみたいんです」と切り出してみたら、案外できるかもしれません。指導書とは全然ちがう文芸研の分析・解釈に基づいた授業を授業研でやつてみたら、思いがけなく共感を得られるかもしれません。勇気ある一步を模索してほしいのです。今ならできることをつぶさないでと願っています。

◆もつと自分を出していいー創造的な教育はそんな素朴な一步から

自分がこれはなんとしても目の前の子どもに伝えたい、そう思うものを伝えることができなくては教師になつたかいがない、そう思いませんか。スポーツに打ち込んだ学生時代から得たことであつたり、教師生活の中で学んだことであつたり、あるいは親として経験したことであつたり、だれもが自分の中の大事なもの、伝えたいものをもつてていると思いません。その内容は様々で、比べることはできません。また教科教育の中でも、このことに関してはもつと深い内容を、もつと工夫したやり方で教えたいとか、発展的にこれをぜひ取り入れたいとか、創造的

な活動をしたいという欲求は誰の中にもあるはずです。

そういう教師の思いや願いを恣意的なものとして（学習指導要領にないなどといって）全て排除する中では、創造的な教育は生まれません。

◆人権、平和、環境・・・いろいろなところで

最後に東京新聞（四月十二日）に掲載されていました。ある小学校の教師が、国立ハンセン病療養所多摩全生園（東村山市）に近い市立青葉小学校への赴任をきっかけに、それまでハンセン病問題に無関心だったことを恥じて、資料館で学び、回復した方に取材して学習教材をつくりました。それから三十年ハンセン病問題を基本的人権を巡る社会問題の一つとして、社会科や国語科の授業を続けたそうです。「問題を知ることはゴールではなく、あらゆる人権問題や自分の生き方に広げられる」とのこと。昔はそういうことができたんだな、と言わいでください。そうではなく、これは今年六十四歳で教壇を去った佐久間建さんが、最後まで息長く続けた授業創造の軌跡です。今ならまだ、教師が授業を創造する余地はあるよと教えられた気がします。見渡せば、平和教育や地域の歴史掘り起こし、環境問題など創造的な仕事はさまざま

◆大会参加を呼びかけましょう！

夏の徳島大会まで、あと3ヶ月。あらゆるチャンスをとらえて参加を呼びかけていきましょう。今、目の前の子どもの問題でちよっとでも周りの先生と話し合えたら、それがきっかけになるかもしれません。これから実践する教材の進め方が話題になつたら、それこそチャンスです。いい関係づくりからこつこつ始めていきましょう。徳島の観光を大会後の楽しみとして紹介するのもアリですよ！



な形であなたのそばにもきっとありますよ。

山口大会に参加して（徳島より）

山口大会には、徳島から車に乗り合わせて、松田先生の例会で学ぶ先生たちがたくさん参加されました。山口での学びを書いてまとめて下さっています。今度は、徳島での開催ですので、各地から仲間をどれだけ呼べるか、これから声かけ、アクションにかかりています。

私たちは、徳島から片道5時間半かけて参加させてもらいました。

1日目は、文芸研がめざす「真に深い学び」について、詩や物語文・説明文を用いて詳しく教えてください、分かりやすかったです。これまで、文芸研について先輩の先生に教えてもらつてきましたが、なかなか一度では理解しづらい。何度も聞くことで、再確認したり、深く学んだりできると思っています。

2日目は、5年「たずねびと」の分科会でした。長時間かけてでも現地で参加させてもらつた甲斐がありました。発表者吉田先生の熱意を感じました。私も教員として、原爆の悲惨さ・戦争の残酷さを子ども自身が実感し、「後世に伝えていくべきだ」と考えられるような子ども達を育てていく責任があると痛感しました。そして、5年生担任として、この国語「た

ずねびと」の教材を使って、子どもたちと共に考えていただきたいと思います。吉田先生の発表を参考に、秋の「たずねびと」に向けての教材研究を進めていこうと思います。

身近だからこそ

横手 里佳（徳島）

後藤 せりか（徳島）

文芸研の国語を学びはじめて、オンラインでの学習会に参加していた。今年の夏、「山口大会」が開催され、対面で語り合うことができた。文章を通して、初めて会つた人と語り合えた、素敵な大会だった。身近にあるモノほど、その存在に気付くことが難しい。それは、人であり、文章であり、言葉なのではないかと、今回の大会を通して考えた。

国語の教科書を手にし、子どもたちと向かい合い、語り合う。身近で、当たり前だからこそ、大切にしなければいけないのでないだろうか。多くのコトが止めどなく流れていく世の中だからこそ、立ち止まり、深く考え、伝え合える時間を生み出すことができるのが、学校だと思つている。

文芸研で学ぶことは、明日からの国語の授業で使

えるだけでなく、生きていくヒントを私にくれる。それを、子どもたちと考え、楽しみながら授業ができる。見て、聞いて、考えて、想像する術を子どもたちにも伝えていきたい。

山口大会で学んだことは、学校に帰つてから職員室で楽しい話題の一つになつた。国語を通して、私自身の見方や考え方があ化してきたように感じている。文芸研で学んだ見方や考え方を、多くの人と語り合つていきたい。

サークル便り（東京サークルより）

東京サークル、青年学校で学んでいる岡祐輔といいます。教職6年目、文芸研で学び2年の駆け出しの教師です。現在は横浜市で5年生の担任をしています。ここに、関東地区の国語の教室の様子を報告します。

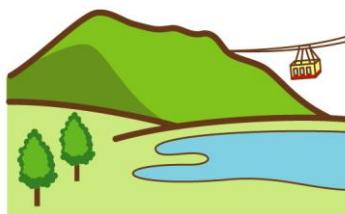
3月31日、横浜市の精華小学校にて関東地区の国語の教室が開催されました。コロナ禍も明け、オンラインと現地開催のハイブリッドで行うことができ

ました。勤務自治体ということもあり、同僚、教員仲間を誘い、参加しました。

参加した高学年部会では光村5年「銀色の裏地」6年「あの坂を登れば」の提案がされました。レポートの綿密な教材解釈を基に学ぶ、絶好の機会となりました。やはり、対面での学習会のよさを改めて実感した会でした。先生方の熱量を直に受け取ることができ。何事にも代え難い学びです。自治体の研究会では「ゴールとなる姿と言語活動」が第一とされ、文芸研式の授業はなかなかできずにいました。しかし、リーフレットやポップを作るとしても、「作品から深い認識を形成すること」の重要性を改めてそれを確認できました。

勤務自治体と言うこともあり、同僚、友人を誘い参加しました。「ここまで深く読めるものなのか？」と彼らは驚いていたようですが、とても大きな学びになつたと聞いています。同僚の先生は学年を組んでいる方ですので、国語の教室での話題を基に「銀色の裏地」授業について話し合うこともありました。忙しい日々ですが、とても豊かな時間でした。

文芸研で学び始めてまだ2年ではありますが、今後も貪欲に学び、理論を自分のものとしていきたいと思います。



青年学校18期 第5回 学習会を終えて

「ようやく実現できた、対面の学習会」

宝塚サークル 若林悠恵

第5回にして、初となる「対面」での学習会。対面で学習会を開きたいと強く思つたのは、その夏の山口大会。リアルに参加者と意見を交わし合い、学びに向かう雰囲気。奮闘してきたそれまでの日々、子どもたちや学びに対する真剣な思い・・・報告者や参加者の思いがしそうと胸に届いてきました。日々、忙しい現場にいながらも子どものために教師としての力を磨いていきたいという思いは、その場にいる人たちの空気や言葉の端々から感じました。その夜は、青年学校のメンバーで懇親会。互いの地域や学校の話など、和気あいあいとしながら山口の郷土料理を堪能。オンラインでは分からぬ、その人・その場のもつ空気感。二日間の濃い学びとともに、「ああ、同じ思いの仲間がいるんだ」という充足感は対面だからこそ味わえると思いました。メンバーと話し合い、12月に対面とオンラインのハイ

プリット方式で学習会を開催することになりました。

学習会の前日は、実践研2日目が終わり、青年学校のメンバーで焼肉へ行くことに。2学期そして実践研の疲れを癒しながら、親睦を深めました。次日、講師の山中先生に「いいなあ。僕は学習会の準備で昨日はマクドだ」との言葉に申し訳なさを感じつつ、口の中ですかに残っているにんにくの匂いを感じながら、第5回目の対面での学習会が始まりました。

今回の学習内容は、△ものの見方・考え方△5年生の中心課題で、講師は山中吾郎先。大阪出身の先生による、ネイティブ大阪弁で『うどんのうーやん』の絵本を紹介されました。絵本と先生の大坂弁を楽しみながら解釈を考えつつ、場を和まさせていただきました。学習会は6時間ありましたが、先生の説得の論法に「なるほどー！」「おもしろい！」と引き込まれていきました。特に、△模式△を考える際、「チバニアン」の話題が突如出てくるではあります。しかし。思いもよらぬチバニアンの話題で盛り上がりながら△模式△地層へと繋がり、わかりやすく典型的なものが△模式△だということを分かりやすく教えてくださいました。学習会を通して、新しい気づきと納得があるからこそ、子どもたちにとつて「おも

しろい」といえる授業・学びになるのだと先生に教えていただいたように思います。授業記録を起こし終えた私は、自身の授業を振り返りながら、学習会をふり返つていきたいと思います。

学習会は5年生の説明文教材である『ことばの意味がわかること』から、言葉を理解することについて考えることから始まりました。辞書で引いたから理解したとはいえない。「言葉の意味は点ではなく、面である」ということ、相対的な関係から理解することの大切さ、言葉の広がりと深さを教師自身が考え、子どもたちと学ぶことの必要性を感じました。この教材から始めるという『選択』の意味を問い合わせるよいよ『ものの見方考え方』の学習がスタート。

『選択』では詩を通して、「なぜカタカタ表記なのか」というように、「なぜAではなく、B」を『選択』したのか、そこからイメージされるものを比べながら、部分から全体（全体から部分）へと詩のイメージを広げどう解釈するか考えていました。授業でも、「比べ読み」があるようにその言葉や表現の意味を考えることが人物や作品全体への意味づけに繋がっていきます。「いい意味」で重箱のすみをつつくことが、イメージの広がりと深まりに繋がり、子どもたちの豊かな読みになるのだと思いました。

自身の実践では、つつくべきタイミングを逃し、大事なおさえや考えを深める場が足りなかつたために子どもたちの理解・納得を生み出せていませんでした。ここが作品全体への理解に深まるというところで、突き詰め、考え合うことで子どもたちがイメージと理解を深めていくその時を逃さず教師が出てくることの重要性を感じました。

一番、印象に残っているのが絵本『リトルレッド』を通して『変換』を学習したことです。「この絵本を知っていますか。」という真正面からの質問ではなく、「この絵は好きですか。」から聞かれました。（参加者の一人が好きですと答えていました）「この絵本を読み終わり、この個性的な絵を好きになれるか聞いてみますね。」と言われながら、絵本を紹介。原作『赤ずきん』と比べながら、『リトルレッド』を読んでいきます。そのあと、「たいていのおんなのこだつたら」をキーワードにこの絵本をどう解釈するか、青年学校のメンバーで話し合うことに。その難しさに冷や汗をかきつつ、みんなでそれぞれの視点や気づきを伝え合いながら試行錯誤しました。山中先生からは、赤ずきんのような「女性」が「銃をもつ」男性によつて守られるべき・助けられるべき存在なのだろうか、という問い合わせから、この絵本がコロナ禍で出版されたことも繋げながら、

人間そして子どもたちのもつレジリエンス（困難にぶつかつてもしなかやかに回復し、乗り越える力）へと話されました。自身の意味づける力の足りなさを感じながら、先生の解釈を通して改めて、文芸を学ぶ楽しさを実感できた時間でした。△変換△を通じ「常識を疑い、常識をくつがえすことから想像的な思考が生まれる」と話され、西郷先生の「逆こそ真なり」との言葉を教えていただきました。（そして常識と反常識の矛盾を止揚・統合する構造にある文芸そのものも△変換△であること。）「本当にそうだろうか」と立ち止まり、違う角度からも考える子どもに育てたいという思いとともに、そのためにも自分自身がその見方・考え方を日ごろから心がける必要があると感じました。

分かり、新しい気づきがありました。山中先生の実践を読んだ時、子どもたちに一つの言葉からイメージを自分の言葉で語らせ、豊かにイメージさせていました。発表に對して控えめな子が多く、表現することが苦手な子が多いクラスだったこともあり、深く鋭く子どもに問うこと、聞き出し、引き出す機会が少なくなっていたことを反省しました。

こうして、学習会をふり返りながら、授業で実践することの難しさを感じました。学習していくながらも、『モチモチの木』の授業記録を起こしたとき、子どもたちの発言やふり返りから、子どもたちが腑に落ちていない様子がみえ、教師自身が△条件△的なものの見方・考え方を本当の意味で理解していないことがわかつたことが分かりました。学習会で「なるほど！」△おもしろい！△と学習できましたが、理論を実践に繋げられるかは、その後に「どれだけ自分自身に落とし込んで理解するまで思考したか」が重要であると思いました。そこが足りず、わかつた「つもり」になつたまま授業したために、子どもたちが「なるほど！」と理解・納得し、△条件△的なものの見方を子どもたちが自分のものにするまで至らなかつたのだと思います。いかに、「教師」という△条件△

が子どもたちの力を引き出し、育むことにつながるのか痛感しました。それと同時に、文芸で学ぶ楽しさを感じながら、もっと文芸理論を学び、自分の中に少しずつでも出来るよう、夏の全国大会に向け、また日々の授業に向けて精進していく決意です。

事務局通信

今年度は桜の開花がすこし遅く始まり、大阪では入学式から始業式にかけて綺麗な桜が子どもたちを迎えてくれました。また、今年度も月曜日始まりの学校現場です。学級開きに、教育計画に、校務分掌の仕事に、ＩＣＴの年度始まりの準備にとありとあらゆる仕事に時間を埋められていく日々でした。皆様はどのような4月を迎えたでしょうか。

働き方改革の名のもとに、校内では担当がつき、

校内の業務量をどうすれば、うまく分散させることができなのか、働きやすくなるのか、年間を通して取り組んでいるにも関わらず、一向に教師の多忙や勤務時間が長くなっている4月ではないでしょうか。

厳しい現場ですが、その中でも授業は始まっています。若い先生たちは、たくさんの仕事量の中でもよい授業をしよう悪戦苦闘しています。一緒に

教材研究をすると「子どもたちの反応が楽しみになりました。」「早く授業したいと思えました。」とすこしホッとした表情がうかがえます。西郷会長の残した、文芸学は、「道しるべ」です。豊かに深く教材をとらえ、子どもたちをつないでいく。是非、悩んでいる全国の先生たちにも文芸学の灯を手渡して広げていきたいと感じる今日この頃です。

さて、夏の徳島大会に向けて、準備が進んでいます。松田真理実行委員長をはじめ、関西・四国・ブロックの皆様が力を合わせて、準備を進めて下さっています。また、提案者は、忙しい中、提案レポートの作成を進めてくださいました。春の実践研では、神戸の地に集い、たくさんの方と共に検討し、よりより大会になるように力を合わせていきたいと思います。たくさんの方のご参加をよろしくお願いします。

☆文芸教育誌、授業シリーズの宣伝・紹介をお願いします。学習会での紹介や職場での紹介、また、ＳＮＳなども活用してよりたくさんの方の目に留まる工夫をお願いします。一冊でも多く購入してもらい、文芸研の活動を広げ、一緒に学び合う仲間を増やしていきましょう。

☆新年度になりました。サークル会費の納入をよろしくお願いします。夏の大会までにご協力よろしくお願いします。

今後の予定

7月13日	(土)	20時～	全国委員会
8月2日	(金)	17時～	サークル代表者会議兼総会
8月3日	(土)	4日(日)	徳島大会
8月24日	(土)	20時～	サークル代表者会議



【事務局員の妄想日記】ある日の学級通信より

そのお惣菜コーナーは、横幅3メートル弱。その若者は、コーナーの右端から攻めていくタイプのようで、右端のお惣菜に30%引きシールを貼り始めたところでした。私のターゲットである鶏のからあげは、左側にありました。もちろん、まだ割引シールを貼られていません。

ここはひとまず、どのからあげを買い物かごに入れるかだけチェックしておこうと品定めをすることに。からあげが6つ入った税抜き328円のものに照準を合わせました。その選定作業をしている間に、シールを貼る若者は先程よりも少し中心部分に迫ってきていました。狙うからあげに割引シールが貼られるまで、もう少しかかりそうな気配。ここでじつとしていると、いかにも割引シール待ちですよと、割引シール目当てでここに立っていますという匂いが強いです。ここは、他のコーナーを見て回つてまたここに戻つて来たらちょうどいいのではないか。店内を適当に回りながら計算しました。いくら割引になるかです。約360円の3割なので、36円×3で約100円引き。これは大きいです。からあげ1つ60円が40円になるということで、かなりお得意です。後は、そのからあげを買い物かごに入れるだけ。そろそろいいかなと、再び例のコーナーへ向か引シールを貼るアルバイトの若者がいました。

他にライバルのお客もいないうれしいお惣菜コーナーは、平和でした。あのからあげも残っていました。ただ、あの若者はだいぶゆっくり作業をしているのか、思つたより進んでおらず、まだコーナーの真ん中ぐらいいにいました。自分の予想では、コーナーの左側に入っていると思っていたのが、それほど来ていました。いつそのこと、声をかけてみるか。「貼つてもらえますか?」と正直に。

ただ、ここであることを確かめてみたいと思いつきました。何も声をかけなくとも、このからあげを手にした時、このアルバイトの若者は声をかけてくれるのか、ということを…。

先程からあげの前で立ち尽くしていた男がその場を立ち去り、またからあげの前に現れたわけです。割引シールを待っているのかもしれない。自分がこの若者の立場ならそう考えて、その男がからあげを手にした時に「シール貼りましょうか。」と声をかけるでしょう。この若者は気を利かせて、そんな声をかけてくれるのだろうか。君はロボットではないんだ。人の心があるはずだ。ただ黙々と右から左へと割引シールを貼り続ける単純作業かもしれないが、お客様の考え方などはもちろん分かるよな。頼んだぞ。

早くもなく、遅くもないスピードで、彼にチャンスを与える時間を稼ぎました。その間、4秒ほど。かごに入れました。入ってしまいました。声はかられない。でも、まだ間に合う。まだ私の表面は、お惣菜コーナー側。今なら、まだその会話は自然な流れだ。背を向けて歩き出してしまつと、わざわざトントンと肩を叩いて声をかけることはできないだろう。そうなつてしまふ前に、「シール貼りましょうか。」と声をかけるだけなのだ。若者よ…。

買い物を終えたレシートには、「鶏のからあげ328円」と刻まれていました(泣)。

※今回はもう一つ

「先生、今日何かお返しするん?」

昨日はホワイトデー。朝からAさんやBさんが聞いてきました。その話を聞いていたCさんは、どうやらホワイトデー用に生チョコを作つたそう!

私は、妻、娘三人、義理の母からバレンタインチョコをもらつたので、お返しする立場です。もちろん覚えてはいましたが、その準備はしていませんでした。でも、計画はしていました。毎年決まっているので迷いはなく、この日はロールケーキを買って帰ります。前日までに用意できないものなので、いつも当日、帰宅前にもう一仕事という形です。

なぜロールケーキかと言われたら困りますが、ロールケーキを食べる機会があまりないことと、ちやつかり自分もロールケーキを食べたいということがあります。

さて、帰宅途中のくずはモール。同じ田的であろう人をけつこう見かけます。色々なケーキがありますが、こちちは田もくれずにただロールケーキを探すだけです。

ホワイトデーと言えば、十年ほど前の、あの出来事が今も思い出されます。その時、ショーケース前でこれにしようと決めた「まいじにわーる」というロールケーキが残り一品というところで、自分の前のお客様に注文されて「まいじにわーる」を手にできなかつたあの日。今も苦い思い出…なつかしいです。そんなこんなで、ロールケーキを買って帰るのが決まりになっていますが、そもそもバレンタインでは、長女が自分でチョコを作るようになります。ただ、思春期の中学生らしい渡し方でした。

「はい。作ったから、やるわ。」

という、照れかくしの言葉がまたかわいいのです

が。

「作ったからやるわ。
ではなく、
やるわ。」

まるでエサやりみたいな感じでバレンタインチョコをもらいましたが、チョコ作りの腕はなかなかのものでした。

今回買つて帰つたのは、「桜と苺の抹茶ロールケーキ」という名前だったと思いますが、それを買つて帰りました。生クリームたっぷりです。家に向かう電車、まいじにわーるをとじかーる電車なのでした。

長女にロールケーキの話をしました。返ってきた言葉は、「ありがとうございます、パパ！」でも、「さすが、パパ！」でもありませんでした。「えへ、今日ホワイトデーやつたっけ?」でした。忘れてたんかいっ!

(完)